

【曲目解説】

ビゼー；「カルメン」組曲

歌劇「カルメン」は、ビゼー（1838・10・25～1875・6・3）の代表作に留まらず、フランス歌劇の最高傑作でもあり、またクラシック音楽やオペラに通暁していない人々にも（内容はともかく）よく知られた作品と言えるでしょう。

1875年3月3日（正に死の3ヶ月前！）、パリのオペラ・コミックで初演されたこの歌劇は、口の悪い評論家に「もう少しで警察の厄介になるところだ」と揶揄されたように、話の筋は、とても「道徳的」とは言えないどころか、今日の言葉で言うなら「教育上よろしくない」と言われても仕方のないものです。プロスペル・メリメの同名の小説が原作ですが、真面目を絵に描いたような、実直・素朴な竜騎兵、ドン・ホセが、煙草工場の妖艶なカルメンの誘惑に転落の道を進み、悪事に手を染め、さらにカルメンの心変わりによって逆上、彼女を殺してしまうという、とんでもないストーリーです。しかし、現代の多くの事件を見るまでもなく、これは古今東西を問わず、男女の間の、永遠の葛藤とも言えるのでしょう。ビゼーの素晴らしい音楽は、この普遍的な男と女のドラマを余すところなく表現しています。

モーツァルト；交響曲第40番

本日演奏する「40番」は、モーツァルト（1756・1・27～1791・12・5）の交響曲のみならず、古今の数ある交響曲の中でも、特に人気の高い作品です。第1楽章冒頭、一度聴いたら忘れられない印象的なフレーズは、テレビ等でもしばしば使われています。

独特の悲愴感漂うこの傑作は、周知のごとく、その前後の39番、41番「ジュピター」と合わせて、モーツァルトの「三大交響曲」と呼ばれます。1788年夏、モーツァルトは、これら最後の交響曲を立て続けに作曲しました。39番は6月26日、40番は7月25日、41番は8月10日に完成しています。これらの交響曲が実際に演奏されたかどうか、はっきりした記録は残っていません。後にモーツァルト自身によって、本日演奏する40番のオーケストレーション（楽器編成）に手が加えられていることから、少なくとも40番、あるいは3曲全部演奏されたという推測もありますが、この時期、友人宛に借金依頼の手紙を立て続けに送っていることから、作曲の動機が、収入になる依頼や自作演奏会開催ではなかったのは確かなようです。さしあたって演奏される見込みのない作品を作曲するというのは、この時代には極めて稀なことで、この三大交響曲作曲の経緯には謎の部分があります。いずれにしても、当時大変悲惨な生活を送っていたモーツァルトが、かくも短期間に、それぞれ趣を異にする傑作を完成させたというのは、やはり驚くべき事実でありましょう。

なお、上述の如く、この交響曲には、二つの版があります。初稿ではなかったクラリネットが、後に付け加えられ、そして重要なフレーズを託されています。クラリネットのない初稿も、緊迫感のある響きがなかなか魅力的なものです。クラリネットありの第2稿での演奏のほうが多いようです。本日もクラリネットの入った第2稿での演奏です。

グズノフ；交響曲第1番 ホ長調

グズノフは、1865・8・10、ペテルブルグで出版商の第7子として生まれ、1936・3・21、パリ近郊で亡くなった、ロシアの作曲家です。幼児から楽才を見せ、10歳でピアノを始め、1879年（14歳）には、バラキレフに作曲を学びます。バラキレフは、彼の才能を見抜き、翌年リムスキー＝コルサコフに紹介します。2年の授業の後、16歳のグズノフは、本日演奏する「交響曲第1番」を発表し、人々を驚嘆させました。さらにこの交響曲が、1884年、ワイマールでリストの指揮によって上演されると、西ヨーロッパでもその名が知られるようになります。1889年には、ペテルブルグ音楽院の教授となり、革命後のソビエトにおいてもその地位に留まりました。

グズノフは、歌劇以外のあらゆる分野において、100を越える作品を残しています。特に交響曲、交響詩の分野に優れ、またバレエ「ライモンダ」や「四季」などもよく知られた作品です。また師リムスキー＝コルサコフとの共同で、ボロディンやムソルグスキーの未完の遺稿を整理・完成させたことも大きな功績です。

本日演奏する「交響曲第1番」は、上述の通り、作曲者16歳の作品ですが、とてもそんな少年の手になるとは思えない仕上がりで、当時の人たちの驚嘆も肯けます。この交響曲は「スラヴ」という愛称で呼ばれることもあります。確かにスラヴ地方の自然や人々の生活が感じられる田園的で爽やかな情緒に満ちた佳品です。